

京都橋大学女性歴史文化研究所第二四回シンポジウム
「近代と働く女性たち」Ⅱ

ヴィクトリア・エドワード朝 イギリスの女性労働

松浦京子

佐伯先生のお話はきょう初めて伺いました。というわけで私の話は、それに対するコメントというかたちにはなっておりません。代わりにほぼ同時期のイギリスの女性史を扱っている者として、いわゆるヴィクトリア朝・エドワード朝の女性労働にみられる特徴をご紹介します、日本との異同を示すかたちにさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ヴィクトリア・エドワード朝と言いますと、一八三七年にヴィクトリア女王が即位し、一九〇一年に亡くなってその次のエドワード七世の治世までを言います。母親が長生きした結果、息子のエドワード七世の在位期間は約一〇年と短く、一九一〇年には次のジョージ五世へと移ります。一八世紀末に始まった「産業革命」という経済上・社会上の大きな変革がいちおう収束し、「革命」と言われる時期が終わっており、工業化社会が定着していき、第一次世界大戦が勃発するまでの時

期にあたります。

第一次世界大戦は、日本では好景気をもたらすという影響はあったもののさほど大きな社会変化にはつながらなかったと思いますが、イギリスは当事国ですので大きなインパクトをもたらしました。ですから、そこでひとつの時代区分をつくり、だいたいヴィクトリア・エドワード朝を純粹な意味での「近代」と見なします。きょうは、この時代のお話をいたします。

この時代は、日本とまったく違うと言い切ってよいかどうかはわかりませんが、大きく違う点として「階級社会」であったということ、まず指摘したいと思います。「あつた」と過去形で言うのは少し問題があつて、現在でもイギリスは階級社会であり、「階級」ということを非常に意識した社会ではないかと私などは感じていますが、この「階級社会」であつたがゆえに、イギリス史研究では、政治の分野においても、一般的労働の分野においても、常に階級を分けて語り、

当然、研究者もその視点を重要視しています。

階級の違いを女性で考えると、「アイドル・ウーマン」と「ワーキング・ウーマン」に分かれることになります。アイドル・ウーマンというのは、「偶像」という意味ではなくて、「怠惰な、何もしない、有閑女性」という意味で、「働く女性」、すなわち「労働者階級の女性」とは区別される存在ということです。

では、階級とは何か。身分と階級は少々違います。身分は生まれ・門地によって規定され、そこからの上昇・下降はなかなか簡単ではありません。ですが、イギリスで言う「階級」は、社会における経済力に裏打ちされたポジションですので、たとえば、「労働者階級」と「中流階級」を対比しての話になりますが、なかには労働者階級のなかから職業によって（いわゆる経済的な成功を得ることによって）瞬く間に中流階級に上っていく者たちもけっこういます。また、「私は中流階級に生まれたけれども、父親が事業に失敗し、家がつぶれて、労働者階級に転落してしまった」という意識を持っている女性たちの文章も読んだことがあります。つまり、階級というのは上昇・下降がかなりある。逆にいえば、そういうことを意識していますから、階級意識が強くなるんですね。上を目指そうと思えば目指せるし、いったん何かあれば、いまは中流階級として存在していても、すぐにその地位から滑り落ちてしまうかもしれない。そういう意識があるからこそ、強い階級意識が生まれる。階級とは、そういうものではないかと思えます。この時代を規定するもうひとつの要素は経済力です。先ほども申し

ましたように、イギリスのこの時代は産業革命後です。産業革命という世界で最初の大きな経済変革を経験し、そうであるがゆえに工業製品の世界中への輸出国、つまり「世界の工場」という存在になりました。ただ、工業生産の分野では、一九世紀後半にドイツやアメリカに追いつけられ、逆転されてしまうのですが、それでもまだこの時点ではイギリスの経済は衰退せず、金融の中心でありつづけました。世界の主な銀行がすべて集まっているロンドンの「シティ」を中核とする「世界の銀行」になっていったのです。つまり、イギリスのお金持ちたちのお金が世界のどの国に投資されるかによって、世界が変わることが起こっていたのです。たとえば佐伯先生が最初に紹介してくださった新聞記事は明治三八（一九〇五）年のものですが、これは日露戦争で日本が勝利した年です。この勝利の背後には、ヨーロッパで日本が戦争債（国債）を売り、それで資金を集めたということがあります。このとき、日本に多額のお金を投資した国としてイギリスが挙げられます。この時代、もう国内の工業生産に投資しても利益が大してあがないと思つたイギリスのお金持ちたちは海外投資へと向かっていたのです。いずれにせよ、世界経済の中心として繁栄を享受していたのがこの時代のイギリスです。

ヴィクトリア・エドワード朝のイギリスの社会構造は、大まかに上流階級、中流階級、労働者階級の三つの階級に区別されると考えていいと思います。そして、上流階級は貴族・地主です。いまもイギリスには爵位を持った貴族たちが厳然といます。また、爵位ではありません

んが、中世の騎士にその名の由来がある「ナイト(勲爵士)」を授与され「Sir」という称号を持つ人たちと、爵位も勲爵士の称号もないけれど広大な土地を領有する地主たちがいます。こうした上流階級は、全人口の二〇三%を占める人たちです。

この二〇三%の人たちがイギリス全土の土地を握っていると考えてください。イギリスの地主は、一部の広大な土地を持っているというわけではないのです。いまでもイギリスでは、普通のお金持ちの中流階級であつたとしても、彼らは土地の所有者ではありません。大半は、土地を借りている借地者です。たとえばロンドンのはたつた四人の公爵によつて領有されていると言います。つまり、中世以来のそれが連綿と生き続けているわけです。

ただし、借地といひましても、五〇年とか一〇〇年の長期にわたる借地契約ですし、その借地契約も一〇〇年分の地代を最初に一括して前払いしているケースもありますので、事実上の土地の所有に近いのですが、でも法的にいえば、土地を所有しているのは数%の上流階級だけです。ですから上流階級は、いまでもイギリスにおいては上流階級として圧倒的な存在なのです。

それに対して中流階級は、ややこしくて、私の資料では上層・中層・旧下層・新下層と分けましたが、普通、ヴィクトリア時代は上層・中層・旧下層ぐらいまでを中流階級と言います。

上層のうち、擬似ジェントルマン(専門職)は医者・弁護士と軍の士官も含めた専門職的な人たちです。簡単にいえば、地主階級の家の息子に生まれて、長男だけが地主の家の跡を継ぎ、次男・三男が目指し

た職業が擬似ジェントルマン職であり、逆にいえば、そういう社会的威信のある者たちが就く職業です。中流階級のなかの経済力がある家の、さらに勉強のできる男の子たちが、中流階級のなかでもより社会的上昇を目指すために就く職業です。当時はオクスフォードかケンブリッジとロンドンぐらいいしか大学がありませんので、大学の教授も擬似ジェントルマン(専門職)に含まれるかもしれません。また、銀行家や大貿易商もこの層に含まれます。

中層は、工場経営者、卸商、企業家、農場経営者です。イギリスの農業は、日本とは全然違います。すべての土地は地主に握られていますから、実際の農業に携わる人たちはその土地の所有者ではなく、地主から土地を借ります。それも自ら耕すというスタイルではなく、大規模な農場地を借り、その経営者として存在するのが農場経営者です。そして、農場というひとつの企業体に雇われる労働者が、労働者階級の下層に属する農業労働者です。農民のレベルも、日本とは全然違います。農場という企業体のなかで働く農民・農業労働者は、基本的に男性雇用で、女性の雇用の多くは臨時雇用でしかないという感じでした。

下層の中流階級として、商店主があります。商店主は、少額の資本を持つている人たちという意味で下層の中流階級に入れました。

中流階級までで人口の二〇%強です。当時二〇〇ポンド以上の収入のあるところです。さらにいえば、経済力が階級を分けますから、中流階級の定義は「召使を雇うことができるだけの経済力を持つ者」とも言えます。

それに対して労働者階級は、労働(自分の時間)を雇用主に売ることによって賃金を得る者です。資産や生産のための具を持っていない者が労働者階級です。労働者階級は、人口でいえば七〇数%というレベルになるのですが、上層・中層・下層・最下層に分かれます。

上層の人たちは、いわゆる熟練工ですから、「世界の工場」であるイギリスでは重宝され、彼らの収入はけっこう高いです。本当の熟練労働者になると、年収一〇〇ポンドを優に超え、一五〇ポンド以上というのもあり得たそうですが、そうすると中流階級の下層の下のボーダーレベルとはほぼ同じかわからないことになります。

ただ、先ほど「経済力が階級を決める」と申しました。ならば、とても高い収入を得ている熟練工は中流階級かと申しますと、彼らが「中流ではなく労働者だ」という意識を持っている限りにおいては、彼らは労働者なのです。労働運動の中心であり、労働運動をリードしていた人たちが、この上層の労働者階級になります。

それに対して、中層・下層と、収入によって分かれていきますが、農場での雇用者(農業労働者)は賃金も低く、生活も厳しいということで、下層に入ります。当然、下層の労働者には、安定した雇用を確保できない不安定雇用労働者が入ります。

そして、最下層に入るのは日雇い労働者です。当時のイギリスの都市労働を見ると、一日その日限り雇用されて、日銭を稼ぐような労働者も多いという社会です。

なかなか女性労働の話にならないのですが、少し言い訳をさせてい

ただきますと、佐伯先生はいろいろな新聞記事を紹介してくださって、とても興味深く、私は、目をこらして画面の字を読もうとしたほどもでした。その佐伯先生のお話は、メディアはどのように女性労働を伝えたか、それを通して当時の女性労働の実態を明らかにしていくというものですが、私は、メディアがどう伝えたかではなく、まずは実体として当時の社会がどうであったのかから始めるべきと考えました。なぜなら、イギリスの社会がどんなものなのかをまず知らなければ話ができないからで、そういうわけで、社会構造そのものの話から始めさせていただいたわけです。

さて、ようやく、このような社会における女性労働に、目を向けることとしましょう。イギリスでは一九世紀初頭の二八〇一年から一〇年ごとに国勢調査をおこなってきました。当然、一九世紀前半の国勢調査は、悉皆調査とはいえず、そうとは言えないような、かなり抜け落ちの多いものです。それでも、統計によって社会構造(たとえば職業分布などを量ることができる貴重な史料です)。

そこで、かなり信用度の高くなった一八九一年のセンサスを見てみましょう。女性が多く就いている職業は“Domestic servant”(女中)です。圧倒的に女性の職業は女中なのですね。

そして、女性でありながら手に技術を持ち、それなりに高給を得ることができる技術職・専門職に当たるのが、イギリスの場合、ミリーナー(帽子職人)やドレスメーカー(婦人服仕立職人)です。日本の着物の仕立てとは違って、ドレスメーカーは、服のデザインを考え、デザ

インという二次的な画面から三次的な服をつくりあげるためのパターンをつくり、そのパターンに合わせて布地を切り、縫い合わせていく技術者であり、単なる「お針子」ではありません。ドレスメーカーであると名乗るとすれば、高い技術を持ち、そのために女性の身でありながら幼い頃から徒弟に入って、研鑽を積んだことを意味します。

その次に多いのは綿織物業従事者、いわゆる綿工場で働いている女工さんです。

その次に多いのは、珍しいと思われるかもしれませんが、洗濯業従事者です。洗濯業は、女性の職業において一九世紀にとっても大きな意味を持った労働です。日本でも「洗い張り」という職業が江戸時代からあったのではないかと思います。ドレスメーカーによってつくられた金持ちの豪華なドレスを洗うとなれば、技術も工夫も必要でした。最後にアイロンをかけることによって形を整えるのですが、それこそ高い技術が必要です。同時に、一九世紀の都市生活において、家のなかで洗濯をすることは非常に難しいということで、いわゆる洗濯業が発展しました。そして、最後に挙がるのはチャーウーマン（掃除婦）です。これらの職は、すべて労働者階級の女性によって担われた労働と言えます。

中流階級の女性が就いた労働として可能性があるのは、唯一学校長・教師職のみです。他にもいろいろな職業があつて、当然、中流階級の女性も進出していた職はあると思いますが、センサス上の統計で見ると、女性従事者の多い職は、以上のようなものでした。

つまり、中流階級以上の女性たちの多くは、働いていないのです。いや、「働かないことに意味があつた女性たち」と言うべき存在だったのです。中流階級の女性たちにとって、「こうあるべし」という社会の観念、規範として彼女たちを縛りつけたものは、大きく分けると三つありました。

ひとつは、先ほど佐伯先生もおっしゃった「家庭の天使」（家庭を守護する天使）で、ブルジョア・ファミリ・モデル、簡単にいえば「夫が稼いで、女は家で家事・育児に専念する」というファミリ・モデルのなかの主婦であることでした。

二つめは衛示的消費・余暇の担い手としての女性です。経済力が階級を決め、それがものを言う社会ですから、女たちは夫や父親の経済力を社会に対して誇示しなければならないという役割を担わされたと考えることができます。それが、見せびらかしのための消費であり、見せびらかしのための余暇の過ごし方ですから、いわゆるアフタヌーンティーを楽しみ、派手で目立つドレスを身にまといました。ドレスメーカーが女性職として有望であり、かつ高給を得ることができるというのは、そのドレスを購入したい人たちがいるということです。

その意味で、中流階級の女性たちは労働者階級の女性たちに職を提供している。逆にいえば、中流階級の女性たちのライフ・スタイルを支えているのは労働者階級の女性たちである。そんな関係です。

たとえば、女性職で圧倒的に多かったのはサーヴァント（家事使用人女中）ですが、衛示的経済力の最も端的な誇示の仕方がサーヴァントの雇用です。当時の家庭本には「年俸が二〇〇ポンドになったら一人

の女中さんを雇いなさい。一五〇ポンド程度しかないなら、通いの女中さんを雇いなさい」と書かれていましたが、まさにサーヴァントの雇用は経済力の証でした。だから、これが中流階級の証でもあるわけです。

三つめに社会が女性に求めたのは、社会的ホスピタリティの実践者であることです。ホスピタリティは、施しであり、癒しであり、もてなしという意味合いがありますが、そのもつとも簡単な実践は、「慈善活動」でした。イギリスの上流階級が伝統的に担っていたことにパターナリズム、すなわち、上に立つ者は自分よりも目下の者たちに手をさしのべるというものがありました。いわゆる「ノブレスオブリージュ」と言ってもいいかもしれません。そういうものを上流階級である貴族・地主がずっと伝統的に担っていたのですが、中流階級は経済力を得て、上流階級に対して突き上げをします。その突き上げをするにあたって、経済力でぐつと突き上げると同時に、上流階級が担っていた社会的な機能も自分たちがひき受けるようになりました。そして、その実践が女性に託されたのです。

そういう社会で、女性たちは以上のような三つの役割を担うべしとされていきましたから、当然、賃金労働・経済労働はしてはならない。もし、するとすれば、それは女性にとって中流階級から滑り落ちることを意味しました。当時の社会規範に照らして言えば、そういうふうに言えたと思います。

それに対して、労働者階級は逆です。期待された役割は、中流階級

のヴィクトリアン・ライフ(衛示的余暇・消費)の支え手です。工場の労働力であり、サーヴァントであり、衣類の縫製などをする。同時に、これは佐伯先生が日本でも同じだとおっしゃいましたが、労働者階級の女性なら当たり前のように家計維持の責任者でした。当然、夫は稼ぎますが、稼いだお金をどう使うかを考え、また同時に自分も稼いで、とにかく一家が飢えないようにする。その責任を全面的に背負うのが女性であつた、と言えると思います。

ただし、時代が少し下がり、一九世紀末から二〇世紀前半の帝国主義時代になると少々様相が変わってきます。イギリスの場合、「帝国主義」には社会的意味があつて、新たな労働力、さらに言えば新たな戦争の兵力になる子どもたちを産み育てる階層(労働者階級)の女性(つまり既婚女性)に対して、育児の責任者としての役割が注目されるという結果を生みました。単に低廉な労働力として、ヴィクトリア社会を支えている「労働者の女性」だったはずのものが、未婚のうちは「ちゃんと働いてね」という感じなのですが、「結婚して、少なくとも子どもができたなら、育児の責任者であることの方が前面に立つべきで、働いて子育てがおざなりになるのは、いかん」という意見が世の中に巻き起こり、母性を称揚する論調が出てきます。

それに対して実際の労働者階級の女性たちはどうかと申しますと、「ファミリ・ウェイジ戦略」という言葉がありますが、これにふり回されることがありました。ファミリ・ウェイジとは家族賃金という意味で、夫一人の稼ぎで妻や娘を働かせないでやっていける賃金という

ことです。つまり、労働者の男たちの賃金を上げさせるための労働戦略のひとつで、簡単にいえば労働組合の方針なのですが、一八七〇年代頃からこのファミリ・ウェイズ戦略を全面に打ち出してきました。ここでは、「妻や子、特に娘を働かせなくてもいいだけの賃金を夫たる男には払うべし」となります。

これを裏返せば、妻は働かないし、娘も働かないことを意味します。実際の労働者階級の女性たちが働かないことを絶対視したり、それを当たり前と思うことはなかったのですが、階級意識が明確にあった時代、一方で自分の夫や仲間の男性たちの戦略である「ファミリ・ウェイズ戦略」を支持します。しかし、事に至れば、家計の維持責任者は自分だから、働くことは厭われないということになります。

したがって、娘時代の労働がずっと継続するかと言えば、それはなかなか起こり得ない。結婚後の労働は、家計の状況に合わせて断続的であったり、臨時的であったりしました。さらに言えば、圧倒的な女性職だったサーヴァントは、これは既婚では務まらないのです。理由は簡単です。住み込みだからです。サーヴァントにもいろいろな種類がありますが、いちばん中心である家事使用人・女中職は住み込みだったために、いわゆる未婚の女性職でした。つまり、労働者階級の女性にとって一生の職業に就くことはなかなかかったのです。

このような状況ですから、大きく中流階級と労働者階級を分けなければ、イギリスの労働の話はできません。

中流階級の女性は、働かないことに意味があり、働いてはならなかったのですが、ただし、そうは言っても一九世紀の半ばからフェミニズムが発生します。結婚して、自分を養ってくれる夫を得た女性は働かなくてもいいけれども、中流階級のなかには結婚しない女性も多かったのです。そういう自立・自活を求める女性はいたわけで、彼女たちの職が教師職であり、女学校の先生や住み込みの家庭教師をやっていた。それだけではなく、もつと中流階級の女性にふさわしい職（たとえば医者）を求めるために悪戦苦闘する女性が現れるのはこの時期です。また、公務専門職（役人職）に女性が進出すべきだから、大学の高等教育を求めるという時代でもありました。ですから、女子の中等教育が展開し、専門職への挑戦が始まります。

ただし、ここで注目されるのは、あくまでも階級にふさわしい職であること、そして社会的に有用であることもすぐ意識されました。中流階級の女性は、先ほどの三つの役割を担わなければならないかったのですが、この役割だけでは社会的に有用ではないと思った女性たちが居たのです。当時、「社会に貢献したい。社会で自分が有用であることを証明したい」と思い、専門職に進出していった女性たちが書き残したものを読むと、それをすごく感じます。

一方、一九世紀の第四四半期になると、「ホワイ・ブラウス」職が成長していきます。「ホワイ・ブラウス」は、男性の「ホワイ・カラー」に対する女性版として、意識的に女性史の研究者のなかで使うことがある言葉です。ワンピースのドレスではなく、白いブラ

ウスにスカートとジャケットというきちんとしていて働きやすい姿で働く女性たちで、彼女たちが就いたのは事務職や公務職でした。つまり、中流階級の新下層・新中間層の事務職(ホワイト・カラー層)の女性版であり、そこに女性たちは進出していくことになります。中流階級のなかでも、働くことをよしとし、当たり前としていく風潮が一九世紀の終りにかけて、ようやく登場したのです。

それに対して、労働者階級の上層の女性たちによる新中間層職への進出も起こりました。労働者階級の女性たちの圧倒的な一般職だったサーヴァントや女工さんやドレスメーカー、時には洗濯業従事者というような職業に、新たに商業事務(タイピスト、速記者)や販売員といった「ホワイト・ブラウス職」が登場してきたのも一九世紀の第四半期です。その背景には、一八七〇年に公教育制度がようやく設けられ、女子の識字能力が上昇してきました。それに、イギリスが「世界の工場」から「世界の銀行」になっていったこと、事務のイノベーションが起こったこと、大衆消費社会が到来したことなどの理由があります。ここでようやく、それまではつきり区別がついていた中流階級と労働者階級が、かなり混合し始めた社会になったと言えます。

中流階級の女性たちがどんな専門職を目指したかについては、フェビアン協会の女性によって一九一四年に『七つの専門職に就いている女性労働者たち』という、中流階級の女性の職業案内的な本が出されていますので、参照したいと思います。そこに挙げたのが、教育専門職(学校の先生)、医療専門職(医師)、看護師助産師、救貧委員や地方

公務員、国家公務員、事務職、女優です。

事務職は、労働者階級の女性も就いていますが、中流階級の女性にとっても有望な分野でした。おもしろいことに、女優さんも専門職として挙げられています。女優さんも上から下までありますが、なかには男性の「サー」にあたる「デーム」という勲爵士を授与される女性が出てくるのもこの時代です。

ここで当時の写真を見てみましょう。国家公務員職である中央郵便局では三〇〇〇人の女性が二〇世紀初頭に働いていたと言われていますが、それを示す写真がありますね。女中の口を探すための職業紹介所に集まっている労働者階級の女性たちの写真もあります。夜間学校でドレスメイキングを習っている女性も写っています。かつては徒弟に入って、少女の時代から鍛えられ、手に技術をつけたのですが、この頃には学校でドレスメイキングの技術を教えるようになったのです。

これをメディアがどう伝えたかの一例として、「下町のドレスメーカー」と「上流階級がやってくるウエストエンドのドレスメーカー」というふうに対比された絵(写真)入り社会ルポの本をご紹介します。ドレスメーカーは、たしかに女の子の熟練職ですが、そこには、顧客による格差があったというわけです。ウエストエンドのドレスメーカーの店ではお客としてやってくる上流階級の女性たちが真ん中にいて、その周りにドレスメーカーがいます。長い訓練の末、技術を身につけて、どこかの有名なドレスメーカー店で働いている女性たちなのですが、やつれた顔で描かれています。

つまり、顧客の注文に合わせるために、いろいろな厄介な変更点な

どに合わせるために、夜も寝ないで頑張っている姿として描かれているわけです。当時のメディアでは、このような描写がされていました。完成したドレスは華やかですが、実際につくっているのは暗く、狭い作業部屋です。おそらく普通の家の、地下ではありませんが、せせこましいところに女性たちがたくさん集まっていたのでしょう。

既製の紳士服をつくっている写真を見ると、日本の家内職的な感じます。箱作りも家内職です。洗濯を孤児院で教えている写真もあります。女の子にとって手に技術をつけることは大切で、ドレスメーカーはより技術が低いのですが、その次の技術職としてアイロンがけを教えている写真です。電話交換手という新しい職も出てきました。ロンドンの大きなデパートに働く女性たちが、ショーウィンドーに飾るものの準備をしている写真や、会計にお金を持っていく写真もあります。そして、商品は多くの場合、地方発送をしていましたので、そういう写真もあります。

最後に、一九世紀末から二〇世紀にかけて教育を梃子にキャリアアップしていく女性たちとして、アリス・フォリー、ヘレン・コーク、カスリーン・ベタートンのことをお話ししたいと思います。

アリス・フォリーは、まさに女工です。一九世紀の女性労働の典型の綿紡績工場の女工さんで、組合活動をするなかで組合の書記長にまでなったのですが、労働者の女の子ですから教育は小学校までしか受けていません。でも、その後、WEA(労働者教育協会＝労働者の成人教育機関)に参加し、そこでいろいろな教育を受けて、最終的には経済

学修士の資格を取るぐらい勉強しました。労働者の子は、中学校に進むことはめったにありません。ましてや大学には本当に進めない。ただし、大学に行かない代わりに成人教育(仕事の後の夜間学校に通う)で勉強を続けて、ある意味、社会的に上昇していくことが可能になった時代でもありました。

アリス・フォリーも、その典型で、労働評議会の委員長を務め、治安事を務めました。治安判事は、典型的な名誉職で、第一次世界大戦以前であれば地主が務める職ですが、第一次世界大戦後になると彼女がその職に就くようになったわけで、これは単に女工ではなく、教育を梃子にキャリアアップしたからこそ可能になったと言えます。

ヘレン・コークは、旧下層中流階級と労働者階級の間あたりの家で生まれ、初等教育制度が整うなか教員になることを家族から期待された女性でした。そして、小学校教員を勤めるかたわら有名作家のD.H. ロレンスと知り合いになり、自らの夢である作家への道を実現させることができました。

カスリーン・ベタートンも、まさに労働者階級の娘として生まれたという自覚を持っているのですが、イギリスの場合は奨学金制度が非常に整っていたため、その奨学金で女子の中等教育を行うパブリックスクールへ進むことができました。そこを卒業して、それこそ事務職に就こうかと思ったのですが、また奨学金を得ることができて、オクスフォード大学の女子カレッジで学ぶことができました。彼女の自叙伝によると、この間に自分は親たちの文化、つまり労働者階級の文化

からどんどん離れていつていることを自覚しています。自分は違う社会に足を踏み入れて、階級上昇をしている、ということを感じざるを得なかったと言っています。

そして、実際、オクスフォード大学を出た後、ガヴァネス(住み込みの女性家庭教師)になるのですが、いわゆる上流階級の家を何軒か渡り歩いて、名門グラマー・スクール、パブリックスクールの教員として生涯を終えました。彼女は、「労働者階級に戻ることはなかった。親たちとも文化的に断絶をしたのだ」ということを、一九七五年に書いた自伝のなかで縷々書いています。

実はイギリスの労働者階級には自分の生涯を書き残すというひとつの伝統がありまして、男性の自伝は、大量に一九世紀の初めからあります。そして、二〇世紀になると、女性たちもずいぶん書き残すようになりました。ご紹介したのは、それらの三つの例です。それらを見ると、教育を受けたことによって社会への扉を開けていったという自覚や、そうすることによって階級を上ったという意識を書き残した女性もいれば、「いや、絶対に私は労働者階級なんだ」という意識を最後まで持ち続けた女性など、いろいろ違いがあります。

以上、駆け足してお話ししてきた女性労働の在り方を見ても、一九世紀の終りから二〇世紀の初め、日本でいう明治後期から大正期にかけて、イギリスでも社会の変革が女性にも及んで、それが労働の場にもこのように現れているんだなということを感じることができると思います。この辺が明治・大正期の日本の女性労働と似ているところでも

あり、違うところもいろいろある点かなと思ったので、ご紹介させていただきます。